三毛乱治郎漱石落語 Mon.11.23.2015

夏目漱石作『吾輩は猫である』第三章から

縞「ねぇ、虎さん、おいら英語覚えちゃった。番茶はね、サヴェッジ・ティー(savage tea)っていうんだ」
虎「えっ? そりゃ何かの間違いだろう。番茶はコース・ティー(coarse tea)だ。サヴェッジじゃ、“ばん茶”じゃなくて“やばん茶”になっちまう」

縞「え、やばん茶!? 洒落かい?」
虎「うんにゃ。直訳」

縞「それじゃ、この訳、間違っているの?」（と、『吾輩は猫である』を見せる）
虎「どれどれ、成程。習ったことがないからこう訳したんだろうな。西洋の鳶口や掛矢を訳せず調和を図った東風子に同情する訳だ」

縞「どういう意味だい?」
虎「coarse はな、粒が大きくてきめが粗い、粗雑な物を意味する形容詞だ。その言葉を知らないのに聞かれたもんだから、番茶は煎茶に比べてきめが粗い。だから“野蛮”って、咄嗟に調和を図ったんじゃねぇのかな。柔らかい新芽で作る煎茶に比べて、摘み残しの硬い葉っぱと茎で作る番茶はガサツだからな。それにしても東風子は“さいなら”って逃げられるけれど、聞かれたら“知らない”って言えない教師は辛いね」

縞「日本の英語教育は始まったばかりだものね。それにしても東風さんと苦沙弥先生の話は、こんなところでつながっていたんだね」
虎「うん。それにな、これは西洋通を気取る者への風刺だぜ。金田夫人は英語ができるのかい？」

縞「う～ん。お里が知れる言葉を使うから、高等教育は受けていないよね」
虎「だろうな。英語ができない自分に気付かないで、人のことを笑うのはよくないよ」
縞「そうだね」

虎「それからな、苦沙弥先生と鼻子の顔の罵り合いもよくないが、ここでも西洋と東洋の戦いがある」
縞「どういうふうに?」

虎「日本人の顔に似合わない西洋的鼻だろう? かたや、今戸焼の狸だろ。今戸焼ってな、顔にブツブツがある人の形容なんだ。つまり天然痘が予防できなかった江戸時代の名残の顔を、西洋人を気取る顔がバカにする。一億総西洋化時代の流行病（はやりやまい）だな」

縞「困ったね。鼻子菌が車屋の御神（おかみ）に伝染している。早く食い止めなきゃ」
虎「いま、吾輩君が病気の根源を偵察して、読者に予防接種しているところだ。それはともかく縞さん、金田夫人の形容は面白いな」
縞「どうして？」

虎「だって堤防工事の前髪は二百三高地って名の束髪で、眼はトンネルの切り通し、招魂社の石燈籠みたいな鼻って、わずか三坪の小庭に男の働きを集約しているぜ」
縞「あ、それで夫に対立する顔か。そういう女の人って 19 世紀には少なかったけれど、20 世紀にはどんどん増えて、値下げしないまま店晒しになるんだね」